

《フィールド・ノート》

## 現代アメリカ大都市における都市エスニシティの諸相

——ニューヨーク、シカゴを中心に——

渡 戸 一 郎

## はじめに

筆者は、これまで大都市コミュニティの変容の一局面として、東京・新宿の大久保地区を中心に、国内の都市エスニシティのフィールドワーク<sup>1)</sup>を重ねてきたが、並行して、海外の都市エスニシティの実態にふれる機会を得ることに努めてきた。その一環として、一昨年(2000年)秋の中国・新疆ウイグル自治区訪問<sup>2)</sup>につづき、2001年9月の13日間、アメリカ大都市(ニューヨーク、ボストン、シカゴの3都市)におけるアジア系のエスニック・コミュニティを回った(新宿の市民団体「外国人と共に住む新宿区まちづくり懇談会」代表・山本重幸氏が同行)。しかし、折しも筆者たちがニューヨークからシカゴに移動した翌11日に「同時多発テロ」事件が発生し、事件直後のシカゴにおける市民の受けとめを目の当たりにすることとなった。そこでそのことを含め、本稿では今回のアメリカ大都市のフィールドワークの報告を行うことにしたい。

## 1. ニューヨーク(9月5～10日)

ニューヨークは、1980年代後半以降、S. サッセンに代表される「世界都市」研究において中心的な舞台となってきた。すなわち、多国籍企業の本拠地、グローバル金融センター、そして移民の指向地であるという意味で、グローバルエコノミーの中核的な結節点であるニューヨー

クが、どのような都市社会構造転換を遂げているのかが、そこでの主要な関心とされている。

とりわけ階層分極化仮説については、サッセンの『世界都市』2001年版において90年代の推移に関するこの仮説の妥当性が検証されてきた<sup>3)</sup>。

N. フォナーはその編著『ニューヨークにおける新移民』<sup>4)</sup>の序章で、移民法が改正された1965年以降に到着した人々を「新移民」(主として第三世界出身、とくに西インド諸島、ラテンアメリカ、アジア系)、それ以前、とくに世紀転換期に流入した人々を「旧移民」(圧倒的にヨーロッパ系)としている。そして、ニューヨークにおける「新移民」流入の背景として、移民受け入れの伝統、移民定住の歴史的なパターンゆえに引きつけられる集団の存在、確立された移民コミュニティによって与えられる安全の感覚、すでにニューヨークに居住している親族や同国人の仲間のサポートを得られる見込み、ニューヨークの都市イメージなどを挙げている。

また、近著『変貌するニューヨークにおける移民、トランスナショナルリゼーション、及び人種』<sup>5)</sup>の序章において、R. C. スミスらは、ニューヨークが1950年代のアメリカ生まれの白人労働者の製造業都市から、非白人が数の上ではマジョリティを占める(白人は最大のマイノリティ)サービス産業都市に変化していると述べ、次の3つの事柄に注目している。第一に、ニューヨークが変容する人種民族的ダイナミックスを伴う、移民の重要な中心地であり続けていること、第

二に、人種民族的及びジェンダー的な諸過程が、ローカル経済とグローバル経済における変動と相互に関連していること（とりわけ、アジア系とラティノの差異）、第三に、ニューヨークがトランスナショナルな諸行為のひとつの重要な場所であり、グローバル経済の結節点であること（例えば、アッパー・イースト・サイドの住民がグローバル市場への投資や他の諸活動に結びついているのに対して、イースト・ハーレムの住民は近隣社会の外部に結びつくことはほとんどない）、の3点である。また、先のフォナーの指摘にも重なるが、スミスらは、ニューヨークの政治がロスアンジェルスなどの他の大都市のそれに比べて「移民びいき (pro-immigrant)」な性格を有しているとしている。そしてその理由として、ニューヨークの白人が統治の主要な連合を形成していること、都市の人口構成が結果的に黒人、白人、ラティノの間でより均衡がとれており、また、各エスニック集団により多くの移民とその子どもたちがいること、ニューヨークの政治制度がより広く代表性を担保していること、すなわち都市権力がより民主化されており、議員の選出と紛争の交渉のためのルートをより多く提供していること（以上はジュリアーニ市政に表象されている）、さらに、移民サービスを行うCBOs (Community-based Organizations) が豊富に存在していること、を挙げている。

ちなみにスミスらによると、ニューヨークは1980年から1996年の間に150万人以上の移民を受け入れており、おそらく世界の都市のなかでもっとも多様な移民を受け入れている都市ではないかという。1997年現在のニューヨークの人種民族構成は、非ヒスパニック系の白人36%、非ヒスパニック系の黒人29%、非ヒスパニック系のアジア系8%、ヒスパニック系26%である。また、外国人ストック（移民とその子ども）は、

黒人の55%、プエルトリコ人を除くラティノの59%、アジア系の98%、白人の52%に及んでいる。

以下は、このようなニューヨークの都市エスニシティの諸相に関する、筆者のフィールドノートからの抜粋である。

### （1）エリス島移民博物館

ニューヨークは古くからの移民都市である。その移民たちが新たな希望を抱いてアメリカに入国するゲートのひとつが、マンハッタンの南に位置するエリス島であった。ここには1892年から1954年まで政府の移民局が設置され、通過した移民は1200万人にも上る。その後この移民局は閉鎖され、一時は荒れ果てていたが、1965年に国定史跡に指定され、修復を経て1990年にエリス島移民博物館として公開された。

意外に大きな建物で、エントランスを入ると、かつて移民たちが持ち込んだトランクが山積みされ、その背後にアメリカの移民流入の歴史が分かりやすくディスプレイされている。19世紀以降のアメリカへの移民流入がいかに大きなものであったが、実感される。移民のなかには病氣や犯罪歴等で米国への入国が許可されず、ここから追い返された人もいた。「涙の島」という別称はその事実を象徴している<sup>6)</sup>。また、この博物館にはThe American Family Immigration History Centerが設置されており、1892年から1924年の間にエリス島に到着した人びとを検索できるサービスもある。来館者のなかにはこのシステムを使って、家族のルーツを熱心に検索している姿も見られた。日本の外国人集住地域でも将来、このような移民の歴史を記録・保存・展示する移民博物館を構想することがあってよい。

## (2) チャイナタウン

ニューヨークのチャイナタウンは拡大しつつあり、人口10万人を超え、サンフランシスコを抜いて全米一の規模を誇る。隣接するリトル・イタリーは影が薄い。八百屋、魚屋など中国の生鮮食品を扱う店に混じって、不動産店、移民法律サービス、職業紹介所、美容室、旅行代理店、銀行などのエスニック・ビジネスが並ぶが、何と言っても多いのが中華レストランだ。

*Asia in New York City: a cultural travel guide* (2000)<sup>7)</sup>によれば、1869年の大陸横断鉄道完成後、ニューヨークに中国系移民が増え、今日のチャイナタウンの形成に至っている。広東出身者が多いが、近年では中国本土からの移民が増え、北京、上海、四川料理などのレストランもある。日本食レストランも見られた(日本人の経営とは限らない)。時間の関係で、孔子廟や黄大仙(ウォンタイシン)、在米中国人歴史博物館の見学はできなかった。Peter Kwongの*The New Chinatown* (1987=1990)<sup>8)</sup>によれば、チャイナタウンをつくりあげている諸要因には、国際的要因として、極東の政治情勢の不安定化による華僑資本の逃避や中国人移民・難民の増加、国内要因として、アメリカの移民政策とポスト工業化経済への移行、さらに歴史的要因として、「中華公所」と「堂」(トン)を中心とした非公式政治構造の存在が挙げられている。そして、これらが今日の中国系コミュニティとその地下経済を生み出し、10万人を超える「下町の中国人」の運命を左右していると指摘されている。

## (3) リトルコリア

エンバイア・ステイトビル付近の32stの街角には“KOREA WAY”の標識が立つ。このコリアタウンは小規模だが、ビルを見上げると、

コリア系の看板が犇めいている。前掲の*Asia in New York City*では‘a tightly packed vertical city’と表現されている<sup>9)</sup>。韓国料理店の他に、スーパーマーケット、銀行、書店、土産物店などが並び、ビルの上階には法律事務所、ネイル・サロン、カラオケなどが見える。少し街路が狭いが、新宿・職安通りの景観に共通するものを感じる。スーパーマーケットの内部は食品中心だが、地階にはビデオレンタルショップが作られている。また、土産物店には、短期留学の青年が店番をしており、いま韓国で流行しているキャラクター商品も並べていた。

中華料理と並んで、韓国料理もニューヨーカーによく受け入れられている。とりわけリトルコリアはビジネス街の真ん中に位置するため、韓国料理店はサラリーマンなどによく利用されているようだ。

なお、ニューヨーク大都市圏には約25万人のコリア系が居住しているが、多くは後述のクィーンズ区のフラッシング、ジャクソンハイツなど、またニュージャージー州のフォートリーなどに住んでおり、約180のキリスト教会と同業者組合を中心に組織化されている<sup>10)</sup>。

## (4) ハーレム (Harlem)

マンハッタンを北上し、ハーレムに向かう。アポロ・シアターを見ながら125stを歩く。付近には最近クリントン前大統領が事務所を構えて、話題となった。ストリートには、キング牧師やマルコムX、マンデラ大統領などの写真を売る黒人の露天商や、店舗のシャッターに描かれたアフリカ中心主義的なペインティングなどが見られる。早朝のためか人通りは少ないが、まちは荒れている感じがしない。これもジュリアーニ市政と好景気のお陰だろうか。途中でマックに入ると、働いている人も食事している人もアフリカ系アメリカ人ばかりで、アジア系の自

分たちを逆に意識してしまう。

### (5) クィーズ区

#### ①フラッシング (Flushing) のコリア系と中国系が混在するコミュニティ

マンハッタンから地下鉄で25分。フラッシング駅を降りると、中心商店街は規模が小さく、住宅地が取り囲む。駅周辺の商店街には中国系の店が多い。台湾系だけでなく、大陸系の人も生活している。果物、野菜などはマンハッタンよりも安いようだ。漢字の看板にはビザの法律相談サービスも。しばらく歩くとコリア系の店が並ぶ。路上で野菜を売るアジュマたちの姿がたくましい。小公園の緑陰で憩うコリア系の老人たちも見かける。他にインド人も見かけたが、物価の安さもあり、留学生を含め日本人もけっこう増えているという。

さらに、大陸系中国仏教寺院「舎精航慈」を飛び込みで訪問。80年ほど前にマンハッタンで創建し、中国系移民の郊外化を追って1963年に当地に創られた分院とのこと。信者は40代以上の女性を中心に、日曜には60~70人が集うという。中年の尼さんと最近北京から留学にきた若い尼さんが対応して下さる。

#### ②エルムハースト (Elmhurst) のヒスパニック系のコミュニティ

高架の駅を降りると、そこはヒスパニック系のまちが広がる。スペイン語の雑誌売りの露天商や店の看板が並ぶ。また、仕事の斡旋やビザ関連などの移民サービスの看板も多い。まちにラテン音楽が流れ、道行く人も中南米系のさまざまな人、親子連れなどが行き交う。一軒のメキシコレストランに入る。はじめに声をかけたウェイターは英語が解せず、代わって英語ができるウェイトレスがすぐに出てきて対応してくれる。メキシコ音楽を聴きながら、しばし休息。

フラッシングやエルムハーストの住宅の質は

あまりよくない。明らかに安普請の木造住宅も見かける。クィーズ区にこうしたエスニック・コミュニティが形成された背景には、もちろん住宅の安さもあるが、それだけでなく、ラガーディア空港が近くに立地することも関係しているかもしれない。まさに空港から降り立った人々がそのまま形成したまちともいえる。エルムハーストのまちを歩いていると、同空港から飛び立つ旅客機が爆音をまき散らして上空を飛来していく。

### (6) ヒアリング

#### ①自治体国際化協会ニューヨーク事務所長・石田直裕氏 (9月8日)

「最近のニューヨーク事情について」

石田氏によれば、ニューヨーク市内では110か国語が話されており、家庭で非英語で話しているのは全米では18%だが、ニューヨークでは25%にも及ぶ。全米で不法移民は800万人、うちメキシコ人が350万人。デリ (Deli) などで働いている不法移民は最低賃金以下でも文句を言わない。新規の移民の流入がつねにあることで、最下層の人びとが再生産されており、こうした低賃金労働を抱え込んでいることがニューヨークの物価水準を押し下げ、また米国経済の強さにもなっている。

また、この間に階層分化が進んでおり、それに伴って、子どもたちが多様な階層の子どもと触れる機会が減っている。例えば、日本人のエグゼクティブが住む郊外のスカーズデールはゲイテッド・コミュニティになっている。子どもがいる人はその地域の教育水準で居住地を決める。学校の教育水準が下がると、自分の資産価値も下がるとことになる。富裕な地域の学校の教員の給与は高いが、学校の水準が下がると、校長は首になるという。

石田氏のヒアリングを終え、アベニュー・オ

ブ・アメリカ（6番街）の歩行者天国をブラブラ歩いていて、偶然「今すぐアムネ스티を！すべての移民に永住権と正義を！」のビラをもらおう。ビラの発行元は移民の人権のための連合（Coalition for the Human Rights of Immigrants）他。主にヒスパニック系の超過滞在者の合法化に焦点があるようだ。

## ②日系不動産業者・山本匡志氏（9月7日）

「ニューヨークの不動産事情について」

同氏は、ニューヨーク大学卒業後、地元企業勤務を経て、Stephanie Manhattan Inc. に勤めて9年目とのこと。この会社はオカダ・インターナショナルの子会社の住宅専門会社として設立され10年目になる。日本人の住宅斡旋だけでなく、それ以外の人びとも顧客として対応している。

山本氏によれば、ニューヨーク州には Equal Housing Act があり、住宅差別は厳しく禁止されているが、大家が入居希望者を職業や所得で選別することは許容されており、結果的に人種民族的選別が行われることは否定できない。契約書では大家の権利がかなり強く、不動産業者はあくまでも大家の代理人の立場にとどまる。また、ニューヨークは人種・民族的に見れば、「サラダボール」であり、各エスニック・コミュニティを形成する上では、同じエスニックグループの不動産業者が大きな役割を果たしているという。さらに最近のニューヨークについては、この10年で本当によくなった、とくにジュリアーニ市長の8年の政策で治安も回復した。しかし、消費税が8.25%に上がり、警察の取締りも厳しくなっていて、ニューヨーカーにとっては必ずしも住み良くなったとは言えない面もある。以前の陰影のあるニューヨークを懐かしむ人もいる、という。

## ③30代のムスリムの移民夫婦（9月9日）

現在日本で働くバングラデシュ人M氏の紹介

で、彼の幼なじみである Abu Yousuf 氏（バングラデシュ出身）と奥さんの Ayesha さん（サウジアラビア出身）をインタビューする。

現在ロングアイランドに居住するアブー氏はダッカで高卒後、ニューヨークに留学、現在コンピュータ会社でコンサルタントをしており、あちこち飛び回りかなり忙しいらしい。現在、永住権を申請中だが、取得まで4～5年かかるという。しかし将来はバングラデシュかサウジアラビアに移ることも視野にあるようだ。奥さんのアイシャさんは今春第一子を出産し、現在無職だが、帰国したら技術関係の教育に携わりたいとの希望をもち、二人ともトランスナショナルな生き方を志向している。

## （7）コロンビア大学

同大学はニューヨークでは珍しく、キャンパスとしての形態をもつ大学だ。Bulletin 2001-2002によると、ファカルティ・メンバーには Herbert J. Gans（社会学）、Eugene Litwak（社会学）、Charles Tilly（社会科学）などの教授名が見られる。研究コースとしては、African-American Studies、Asian American Studies、Human Rights、Latino Studies、Women's and Gender Studies などと並んで、社会学、都市研究がある。Newsweek の *How to Get Into College* (2002 Edition) によれば、学部生4,018人の構成は男性49%、女性51%；アフリカ系アメリカ人9%、アジア系アメリカ人15%、ラティノ7%、ネイティブ・アメリカ人1%弱、留学生4%などとなっており、アジア系アメリカ人の存在が目立っている（大学院までを含めると<sup>11)</sup>、アフリカ系アメリカ人8%、アジア系アメリカ人9%、ラティノ9%、ネイティブ・アメリカ人0.1%）。大学近くの書店でもエスニック・スタディーズの本が沢山並べられており、エスニック・スタディーズが大

学教育研究のごく当たり前の領域をなしていることが改めて印象づけられる。

## 2. ボストン（9月9日）

ニューヨークからボストンへ、アムトラックで日帰り旅行（片道4時間）を試みる。アメリカ建国の歴史的ゾーンであるボストン・コモンからフリーダム・トレイルに沿って歩き、人で賑わうクインシー・マーケットを経て、ノース・エンドのイタリア人街やチャイナタウンその他を見学する。ノース・エンドは、都市社会学では参与観察の代表的なモノグラフの一つ、W. H. ホワイトの『ストリート・コーナー・ソサエティ』<sup>12)</sup>の舞台である。ハーバード大学の大学院生ホワイトは、1937～1940年まで当時「問題地区」とされたイタリア系スラムのこの地でフィールドワークを行い、ストリートにたむろする青年たちを起点に、ボストンにおけるイタリア系コミュニティの社会構造を明らかにしていった。

日曜日に訪れたせいか、ノース・エンドは観光地化している印象を受ける。しかし、裏道に回ると、イタリア系移民の高齢者がアパートの玄関前で立ち話したりする光景が見られる。デリではイタリア語の新聞が売られ、またマリア像を担ぎ、イタリア国旗を掲げるパレードに出会う。一方、全米4位を誇るというチャイナタウンは残念ながら、十分見学する時間がなかった。

ボストンへの往路の列車は空いていたが、帰路のワシントンDC. 行きは満席に近い。ハーバード大学やMITの大学院生なのか、ノート・パソコンを開いて作業をする人、分厚い原稿をチェックする人、専門書を読む人など、知的雰囲気が車内に漂う。車窓から見るロングアイランドの海岸線は複雑に入り込み、ヨットやレジャーボートが沢山係留されており、リゾート地帯をなし

ている。

## 3. シカゴ（9月10～18日）

### （1）都市の空間構造と歴史

TVドラマ「ER」や映画などでもよく登場するシカゴ名物、ループ（Loop）の高架鉄道。ダウントウンでは、林立する高層ビルの谷間の古びた高架を列車が轟音を立てて環状に行き交う。1920年代にシカゴ大学の社会学者 E. W. バージェスが作成したシカゴの同心円地帯図では、ループはまさに都心ゾーンを示している。ループ・エリアには、世界的な多国籍企業の本社、先物取引所、商品取引所、証券取引所、銀行などの経済機能と、連邦政府ビルや市庁舎などの政治行政機能、さらには美術館、博物館、図書館、劇場などの文化機能が集積している。ミシガン湖畔に位置するシカゴはその美しい景観とともに、有数の観光都市でもある。

シカゴは19世紀後半以降、多くの移民を受け入れ（1930年頃がピーク）、中西部の産業都市として急成長する。とくに1871年のシカゴ大火以後、アメリカ国内でもいち早く近代的な高層ビル群が建造された。その大火で焼け残ったウォータータワーを見学後、マグニフィセント・マイルの愛称をもち繁華街となっているミシガン通りを北上し、H. W. ゾーボアの『ゴールドコーストとスラム』(1929)<sup>13)</sup>の舞台となったゴールドコースト周辺を歩く。

この地区は、かつてシカゴに成功の夢を抱いて流入した下層の人々や移民をまず受け入れたスラム街（貸部屋、安宿）と、実業家 P. パーマーによって1882年に開発された高級住宅街（成り上がりを含めた上流社会）とが隣接した典型的な「遷移地帯」であったとされている。しかし今日ではスラム街の面影は一切なく、落ち着いた雰囲気の高級住宅地がつづく。集合住

宅だけではなく、きれいに修復した古い屋敷も並ぶ。各家の前の庭の草花がよく手入れされている。犬の散歩をする人と何度も行き交う。また、ミシガン湖を望むレイクショア・ドライブ沿いには高級アパートメントが立ち並んでいる。

シカゴ歴史協会（Chicago Historical Society）で、シカゴの都市的発展過程の展示を見る。18世紀の毛皮商人の小屋の再現、インディアンの暮らし、白人による侵略戦争と開拓、シカゴ大火のフィルムなど。大火の際の混乱と町の復興を当時の市民がどのような思いで受けとめたかを表現する一人芝居も行われ、博物館の空間がそのまま小劇場と化す。

世界で2番目に高いといわれるシアーズタワーの展望階（102階）からシカゴの夜景を見ると、近現代建築の粋を集めたダウントウンのスカイスクレーパーと、それを中心に西南北にどこまでも広がるグリッド状の光の列が見渡せる。思わず息をのむ光景。シカゴの都市空間の形態と広がりが見え、一目瞭然だ。“光輝く都市シカゴ”——しかし、そこにはさまざまな階層、民族の人びとがそれぞれの思いで到着し、うごめきながら生活していることに思いをはせる（なお、9月11日のテロ事件直後、シカゴの高層ビルや主な公共施設はすべて数日間閉鎖された）。

ループのすぐ外側（西側）のインナーシティに位置する、ギリシャ人街（Greek Town）とかつてのリトル・イタリーを訪問する。これらの地区も、バージェスの同心円地帯図に記されていた。しかし、ギリシャ人街にはギリシャレストランがいくつか立地するのみ、またリトル・イタリーでもイタリアレストランやピザ屋を数軒見かけるが、往年の面影は少なく、中国レストランも混じっている。

続いてリトル・イタリーの近くにあるイリノイ大学とキャンパス内のジェーン・アダムス／ハル・ハウス博物館（Jane Addams' Hull-

House）を見学。移築修復された落ち着いた印象の建物だが、思ったほど大きくない。スライド・ショーを見た後、1895年の“Neighborhood Ethnicity Maps”の複製を入手。ロンドンのトインビーホールの活動に強いインパクトを受けたジェーンは、労働者階級とともにあることを決意し、1889年にこのハル・ハウスを設立。このマップづくりを通じて、地域の社会問題を明らかにし、新到着の移民たちの生活ニーズ、福祉ニーズに応える社会サービスを次々に立ち上げていった。

一方、サウス・ループ（ループの南側）のインナーシティ地区（黒人居住地区）を歩くと、人通りは少なく閑散としており、時折物乞いの黒人ホームレスに出会うくらいであった。しかし、あまり荒廃した印象を受けない。また、かつてこの辺りが白人の良好な住宅地であったことを示す、白人富裕者の屋敷が歴史的建造物として保存されている（Kimball 邸など）。

シカゴ大学もサウス・ループに立地している。シカゴ大学は1893年創立。大きな伝統を感じさせる建物が並ぶ広大なキャンパスを歩く。とくに社会学部事務室にてR. E. パークなど歴代の教授の写真とバージェスの同心円地帯モデルのスケッチを見る。学内はまもなく新学期が始まるので、多様な人種民族から構成される学生たちが戻りつつある。

シカゴのインナーシティには、上記の他に多様なエスニック・コミュニティが展開している。以下では、今回訪問できた主要な地区の記録をまとめておきたい。

## （2）チャイナタウン

シカゴのチャイナタウン（芝加哥華埠）は10ブロックほどで、サンフランシスコやニューヨークに比べると小規模である。しかしここには広東料理店、潮州料理店と並んで、職業紹介所、

中国医院、食料品店、旅行社、銀行、宗親会事務所、キリスト教会、葬祭場、小学校、シカゴ公共図書館分館（中国語と英語で表示されている）などが見られる。中国系の若者や子どもたちが路上に群れている。近づくとも中国語（広東語？）で話しているが、一部英語も聞かれた。シカゴ大学の社会学の大学院生たちは、前期にかならず市内のエスニック・コミュニティを回るプログラムに参加することを奨励されているが、ここはその一つのフィールドとなっているという。

### （3）ベトナム系タウン

ノース・サイドのインナーサバークに位置するアーガイル（Argyle）のベトナム系タウン（中国系が混じり、サウス・ループの古いチャイナタウンに対して「ニューチャイナタウン」と呼ばれる）とキンボール（Kimball）のコリアタウン（通称「ソウルドライブ」）を訪ねる。

シカゴの都心から鉄道で20分ほどのアーガイル駅は中国風の駅舎になっており、また駅周辺に中国語とベトナム語、またそれらの併記された看板が目立つ。「華人敬老會」「協勝公會」「潮州同鄉会」の表示や、「アーガイル／アジア・マーケット・プレイス」の旗も見られる。しかし中国系の書店（店番の若い女性は英語があまり通じない）や洋装・宝飾店（開業10数年で息子から母親が引き継ぎ、母親一人で切り回す。筆者たちを明るい態度で歓迎してくれ、他の中国系の客に対してはもてきぱきと対応していた）で話を聞くと、ここには圧倒的にベトナム系の人びとが多いという。メインストリートに出ると、「ニュー・サイゴン」などと銘打ったベトナムレストランなどが確かに目立つ。まちには黒人やヒスパニックらしき人が現業労働で働く姿が見られる。駅近くのシカゴ公共図書館分館を覗くと、そこには中国語の本が書架5段

×10本、ベトナム語とスペイン語の本がそれぞれ書架6段×4本あり、意外に中国語の本が充実している。ということは中国系ベトナム人が多いのであろうか。

同図書館で「9月は連帯月間（Unity Month）」というパンフレットを入手する。この月間は1992年以来10年目を迎え、シカゴ市とHuman Relations Committeeの共催で、差異を超えてやってきたすべてのアメリカ人を祝福するための共通のヴィジョンを提案するものだという。討論会やコンサートなど、さまざまなイベントが予告されている。リチャード・デイリィ市長の挨拶文には、「シカゴは多くの顔をもつ都市です。私たちは世界のすべての場所から来た人びとの豊かな文化的・エスニックな遺産の恩恵に預かっていることを誇りに思います。シカゴに家郷を築いたそれぞれの国の人びとはその伝統・芸術および習慣を、都市生活の構造に織り込み、シカゴをエキサイティングで多様な都市にしてくれました」とあり、またウッド委員長メッセージには「私たちを引き離しつつける人種差別、性差別、同性愛者差別、外国人嫌い、そしてすべての『イズム』と『フォビア』に立ち向かおう」と記されていた。まさに多民族＝多文化都市シカゴならではの政策理念といえる。このような月間を繰り返す背景には、1992年のロス暴動という不幸な出来事の記憶と教訓を継承することが大切であるとの認識が存在しているようだ。

なお、図書館の前には「芝加哥北華埠華人活動中心」（North Chinatown Community Center Chicago）が立地していた。

### （4）コリアタウン（ソウルドライブ）

アーガイルから一つだけ駅を戻り、ローレンス駅から81番のバスに乗り、ローレンス通り沿いに20分くらい行くと、沿道にはスペイン語や



英語、中国語の看板に混じってハングルの看板の店が増えてくる。キンボールで下車。道路標識に“Seoul Drive”の表示。

しばらくローレンス通りをぶらついた後、あるコリアンレストランに入ると、中高年のコリアン男性が6人でビールを飲みながら談笑していた。早速こちらでもビールを注文して話をきかせてもらう。このキンボールのコリア系コミュニティは、韓国各地から来た人びとによって1970年代後半から形成されたという。居住者の職業はさまざまようだ。今では住みやすいところだが、初期にはいろいろ苦勞もあったという。現在は、韓国系よりもヒスパニック系の人口の方が多くなっている。

韓国語混じりの英語で以上のような話を聞いていると、一人の60代半ばの男性が突然日本語で「あなたの家は東京ですか」と切り出し、「私の日本名は平岡忠夫です」と自己紹介。こちらが面食らっていると、この人はソウル出身で、日本の植民地時代に小学校で日本語を3年間勉強し、毎週月曜には神社にも連れて行かれたと話す。当時はいろいろあったが、現在の韓国と日本は仲良くなったし、これから仲良くしていかなければならないという。まさにポスト・コロニアルなバックグラウンドだ。彼がどういう経緯で移民したのか、大勢のなかでは聞けなかったが、こうした年代の人が第一世代として米国に移民したのだ、と改めて思う。ひょっとしたら、ベトナム戦争に従軍した世代かもしれない。しかしこうして移民の第一世代の人びとが集い、リラックスして冗談を言いながら母語で語り合っている姿を見ると、エスニック・コミュニティの社会的な意味が何かをつくづく考えさせられた。

(5) シカゴ日本商工会議所・斉藤進事務局長  
ヒアリング(9月14日)

「シカゴの日系企業と日系社会について」

シカゴ日本商工会議所は、都心のシカゴ・トリビューン社やシカゴ・サンタイムズ社に隣接する Equitable ビルの31階にある。以下、斉藤氏の話。

商工会議所が資金援助している双葉会が日本人学校を運営している。全日制校(小・中約200人)と補習校(約700人。一部、日系子弟も通っている)がセットで整っているところはニューヨークとロスアンジェルスとシカゴしかない。補習校は双葉会が発足した1966年に開設。日系企業は90年頃がピークで400社あったが、その後減少し、現在は380社。駐在員は経費がかからない若い年代に変化しており、またローカルスタッフを多く採用する傾向が高まっている(いわゆるローカリゼーション)。シカゴはビジネス・ロケーションとしては、全米のどこに行くにも日帰りが可能な便利な位置にあり、また物流の拠点でもある。最近ではボーイングの本社もシカゴに移転してきた。さらにエンターテイメントも豊富なことが評価されている。

#### 4. 同時多発テロ直後のシカゴ一日誌から一

9月11日、アメリカを襲った同時多発テロ事件は、シカゴ滞在二日目の筆者に大きな衝撃を与えた。事件そのものの大きさもさることながら、事件の背景に関する情報の不足、TVを典型とするマスメディアの混乱とナショナリズム喚起へのシンボル操作などを強く感じた<sup>19)</sup>。シカゴのまちを歩いていると、一方では日に日に増えるビルや民家の星条旗にナショナリズムの高まりを感じるとともに、他方では追悼集会などの場でムスリムなどエスニック・マイノリティを排除すべきではないというメッセージを掲げる人も見られたが、全体としては平穏な日常生活が続いていた。また、自国がアメリカの戦争に巻き込まれることを懸念するパキスタンから

の移民、戦争反対のアフリカ系アメリカ人などの声も聞くことができた。今後アメリカの「多民族体制」<sup>5)</sup>がどのように機能するのか、注目したい。以下では、日誌の一部を掲載させていただく。

9月11日(火) 朝、ホテルのTVでニューヨークとワシントンDC. の同時多発テロを知った。昨日までニューヨークにいただけに、この大きさと意外性に現実感が得られない。まるでハリウッドの映画を見ているような超現実に見える。ワールド・トレード・センターの二つのタワーが崩壊してもなお、しばらくはTVに釘付けになる。国内の航空便すべてがキャンセルされ、シアーズタワーをはじめ、ダウントウンの主要な高層ビルと公共施設は閉鎖された模様。ブッシュ大統領はテロリストが民間航空機をハイジャックして攻撃したと発表し、“National Tragedy”と述べた。CBSは‘Attack on America’のサイドマークを入れ始めた。TV報道によると、NYのマンハッタンは14st以南が封鎖状態になったようだ。

ダウントウンに出るため、タクシーに乗ると、日本にいたことがあるというスリランカ人のタクシードライバー(日本語を少し話せる)がChicago Sun-Timesの号外をくれた。「パールハーバー以来の最悪のテロ攻撃(Worst terror attack since Pearl Harbor)」との大きな見出しにショックを受ける。アメリカは南北戦争で国内が戦場になったことはあるが、それ以降、真珠湾攻撃を除いて、直接本土を攻撃されたのはこれが初めてなのだ、という事実改めて気がつく。

12日(水) 集団テロ後の状況把握のため、ダウントウンの在シカゴ日本総領事館へ行くが、たいした情報は得られず。対応してくれた職員のア楽観的な態度に疑問をもつ(外務省官僚の何

と危機感のなさよ!)。その後、ゴールドコーストを再び歩き、ビーチへ。主な高層ビルの職場が閉鎖になったためか、湖岸ではジョギングやサイクリングする人、ローラーブレードする人、日光浴する人など、意外にのんびりした姿を見る。食料品を購入し、ホテルに戻る。TVで情報収集するが、精神的に落ち着かない。ブッシュ大統領は「これは戦争行為だ」と声明を出した。一体どうなるのか、状況の展開がまるで見えない。

13日(木) TVでは、パウエル国務長官が会見し、オサマ・ビンラディン氏を主要な容疑者と認定した。

14日(金) シカゴ商工会議所のヒアリングを終えて Equitable ビルの外に出ると、広場一杯に人々が集まり、今回の犠牲者の追悼集会が開催されようとしていた。そのまま参加。打ち振られるアメリカ国旗の波。“ゴッド・セイブ・アメリカ”の合唱。しかし、集会の傍らでは、「この困難な時にこそ互いに支え合おう。黒人も白人もユダヤ人もアイルランド人もムスリムもクリスチャンもアラブ人もアジア人もラティノも仏教徒もアフリカ人もみなアメリカ人だ」とか、「ユダヤ人、アラブ人を敵とすることを拒否する」などと書かれた手書きのポスターを掲げる人びとも見られ、急速にナショナリズムが高まるなかで、ムスリムをはじめエスニック・マイノリティを排除しないように歯止めをかけようとする人々の存在が目をついた。

なお、ブッシュ大統領はこの日、ニューヨーク市の現地に入り、救助活動が続ける作業員たちと肩を組んで、ハンドマイクでアメリカ市民の団結を呼びかけた。TVはその様子を繰り返して流している。この映像がもたらす効果は大きいものと思われる。

15日(土) CNNが“America’s New War”や“Spirit of America”のサイドマークを流

している。ビンラディン氏の映像がさかんに流される。シカゴのまちには、半旗にされた星条旗を掲げる家が目立つ。

16日(日) 終日ホテルで体力温存。近くのスーパーまで買い物に出ると、公園でのんびりチェスを楽しむ黒人の老人などを見かけ、ホットする。FOXニュースによると、今日の航空会社の運行状況は80%とのこと。

17日(月) USA TODAY紙によると、圧倒的なアメリカ人が先週の攻撃に関してテロリストへの報復を支持しているという。500万ドルにつり上げられた1998年のオサマ・ビンラディンの懸賞広告も再掲されている。

外出先からホテルへ戻るタクシーのドライバーは、ドバイから20年くらい前にシカゴに移住したというパキスタン人。当地で大学を出たが、よい仕事に就けず、タクシードライバーをしているという。今回のアメリカ攻撃でパキスタンがアフガニスタンの敵にならないよう、パキスタンは直接アメリカを支持しないことが賢明だ、一番悪いのはイスラエルだ、と話す。

ホテル帰還後、テレビをつけると、CNNニュースがウォールストリートその他のニューヨークのビジネスが再開し、市民生活が本格的に回復したこと、しかし、米国内にはハイジャッカーの仲間がまだ潜伏しており、厳しい警戒が続いていると報じていた。緊張が続く。

18日(火) 午前5時ホテルをチェックアウト。タクシーでオヘア空港へ。当初の予定を5日過ぎて、やっと帰国の途に着く。このタクシーのドライバーはアフリカ系アメリカ人の中年の人で、ラジオのニュースを聞きながら、武力による解決に強く反対していたことが印象に残る。

#### 【追記と謝辞】

帰国後、ニューヨークとシカゴでお世話になった方々にインターネットで安否を問い合わせた

が、全員の無事が確認でき、ホットした。それにしても今回の事件で犠牲になった人々の多さに改めて驚くとともに、心からの哀悼の意を表したい。彼ら／彼女らのなかにはニューヨークやボストンですれ違った人もいたかもしれない。また、ニューヨークかボストンで、筆者たちのすぐ近くに「テロリスト」がいた可能性も否定できない(それにしても一体「テロ」とは何なのか。国家の有する暴力や国家間の「戦争」とはいかなる点で異なるのか)<sup>16)</sup>。

くしくも一昨年新疆ウイグル自治区への旅ではカシュガルまで足を伸ばしており、アフガニスタンやパキスタンとの国境はすぐそこであった。不思議な巡り合わせを感じる。その意味でも、筆者としても今回の事件後のアメリカのみならず世界の対応や変化をできるだけ冷静に受けとめ、この出来事の意味をしっかりと考えてゆきたいと思う。

最後に、今回の調査旅行でお世話になった多くの方々に謝意を申し上げたい。とくに、コロンビア大学留学生の今井直子さん、白英俊さん(父親韓国人、母親中国人の北京生まれ韓国育ちの朝鮮系留学生、拓殖大学卒)、沈昭希さん(韓国人留学生)、シカゴ大学の日本人留学生・山浦ちぐささんと中国人留学生・任雪飛さん(東京都立大学・都市研究所の修士課程修了)には、エスニック・コミュニティに同行し、通訳してもらった。改めて感謝したい。

なお本稿は、帰国直後の9月にまとめたフィールドノーツに若干手を加えたものであることを、お断りしたい。

#### 註

- 1) 明星大学社会学科渡戸研究室『変貌する大都市インナーエリアー第2次外国人急増期の大久保・百人町を中心として』2001年3月、渡戸一郎「グローバル化による新たなローカ

- ル化の位相と意味」地域社会学会編『シティ  
ズンシップと再生する地域社会』ハーベスト  
社、1998年、ほか。
- 2) 渡戸一郎「中国・新疆ウイグル自治区訪問記」  
『明星大学社会学研究紀要』第21号、明星大  
学人文学部社会学科、2001年3月。
- 3) S. Sassen, *The Mobility of Labor and  
Capital: A Study in International Invest-  
ment and Labor Flow* (1988=1992、森田  
桐郎ほか訳『労働と資本の国際移動—世界都  
市と移民労働者—』岩波書店)、S. Sassen,  
1991. *The Global City: New York, Lon-  
don, Tokyo*. Princeton UP (Second Edi-  
tion: 2001) ほか。
- 4) N. Foner. (ed.) 1987. *New Immigrants  
in New York*, Columbia UP. (Com-  
pletely Revised and Updated Edition:  
2001)
- 5) R. C. Smith, H. R. Cordro-Guzmán, and  
R. Grosfoguel, "Introduction" in *Migra-  
tion, Transnationalization, and Race in  
a Changing New York*. eds. by H. R.  
Cordro-Guzmán, R. C. Smith, and R.  
Grosfoguel. (Temple UP., 2001)
- 6) ジョルジュ・ペレック (酒詰治男訳) 『エリ  
ス島物語』青土社、2000年。
- 7) Asia Society, 2000, *Asia in New York  
City: a cultural travel guide*, Avalon  
Travel Publishing.
- 8) P. Kwong, *The New Chinatown* (1987=  
1990、芳賀健一・矢野裕子訳『チャイナタウ  
ン・イン・ニューヨーク』筑摩書房)。
- 9) *Asia in New York City*, p.207
- 10) op. cit p.209
- 11) Columbia University のウェブサイト参  
照。
- 12) William F. Whyte, *Street Corner Society*  
(1943=2000、奥田道大・有里典三訳『スト  
リート・コーナー・ソサエティ』有斐閣)。
- 13) Harvey W. Zorbaugh, *The Gold Coast  
and the Slum* (1929=1997、吉原直樹ほか  
訳『ゴールドコーストとスラム』ハーベスト  
社)
- 14) 外岡秀俊・枝川公一・室謙二編『9月11日メ  
ディアが試された日—TV・新聞・インター  
ネット—』(本とコンピュータ叢書) トラン  
スアート、2001年には、この事件後の各国の  
マスコミ報道とインターネット上での情報交  
換の、二つのメディアにおける情報の質の差  
異が記録また討議されており、興味深い。
- 15) 五十嵐武士「多民族社会と国民的統合のしく  
み」五十嵐編『アメリカの多民族体制』東京  
大学出版会、2000年、p.103。五十嵐は、ア  
メリカが多民族化の深まりにもかかわらず、  
国民的統合を保持させているのは、移民の民  
族性がアメリカ社会で変容され、アメリカ人  
としてのアイデンティティをもつ、エスニック・  
グループに変貌しているからではないか、  
という暫定的な結論を導き出している。
- 16) 『現代思想 総特集：これは戦争か』2001年  
10月臨時増刊号 (青土社) の各論考を参照。  
例えば、S. サッセンのエッセイ「豊かな国  
が逃れることができない罠」は、今回の出来  
事を、冷戦後のアメリカが主導するグローバ  
リズムが、地球規模の不均等な階層的格差  
(南北格差) を拡大させた結果、途上国側の  
多重債務と怨嗟の蓄積を招いているにもかか  
らず、その事実を直視しようとしないう「世界  
の北」に対する、「世界の南」からの最終的  
な手段による警告、と位置づけている。

(わたど いちろう、本学科教授)